



少年と犬

～ Endless World ～
III

AUTHOR KANTO

原作：カント

ILLUSTRATION MIZUKAMIHATATI

イラスト：水上二十歳

© DrawingWriting

少年と犬

～ Endless World ～

Ⅲ

©合同サークル DrawingWriting

原作：カント イラスト：水上二十歳

少年と犬

~ Endless World ~
III

AUTHOR KANTO

原作：カント

ILLUSTRATION MIZUKAMIHATATI

イラスト：水上二十歳

© DrawingWriting

- 第零話 幕間く火をくべる者
- 第一話 さよならの始まり
- 第二話 選択
- 第三話 対峙
- 第四話 死闘
- 第五話 雨音
- 第六話 別離
- 第七話 果たせない約束
- 第八話 炎を纏い獣は吼える



第零話「幕間〜火をくべる者」

——鐘が鳴っている。雨がそぼろに降る中で。

彼は、手を握っていた。傍らの老人が差し出してくれた左手を、強く。そして、歩いていた。灰色の街路を、大勢の大人と共に。

胸中は複雑だ。喪失感と、感謝——二つの感情が複雑に絡み合う一方、哀しみは感じない。母が棺に収められた時からそうだった。流れる涙の一方で、これが哀しみである——そう明言出来るような、確たる感情はついで見つからない。

哀しい、と感じる余裕が無いのか。

悲しい、と感じる心が無いのか。

「フトー」

隣を歩く背の低い老人が、静かで、深みのある低い声を放った。彼が意を尋ねるよりも前に、老人は続ける。今は何も考えなくていい、と。

「それより、しっかりと母ちゃんを見送ってやれ。俺が隣に居てやる。何も心配は要らねえ」

彼と老人のすぐ前には、棺を四方から担ぎ上げて歩く、大柄な男が四名。彼らは何も言わない。ただただ、職務を——死者を静かに送るといふ自らの役割を、淡々と、しかし誠実にこなそうとしている。

職務——そう、職務だ。自分にとつてのそれは、母を護ることだった。

記憶の底にある父の姿は、悪漢に他ならない。父はいつも母を殴っていた。それを止めようとする自分をも。母はいつも泣いていて、それはずっと変わらなかつた。父が何処かへ出て行つたきり、戻らなくなつてからも。

強くなりたかつた。

母を護りたかつた。

だから、劍聖と謳われる英雄が、偶然にも近所に住んでいると知つて、彼は傍らの老人のもとに押しかけた。押しかけて、強引に——それこそ、岩に齧り付くように——師事を仰いだ。いや、懇願した。その甲斐あつて、丁稚奉公扱いで老人のもとに通うことを許された。

母を護りたかつた。

強くなりたかつた。

「マヒトさん」

「何だ」

「俺、これからどうすればいいでしょう」

護るものは、流行り病で呆気なく消えたというのに。

「俺、何のために生まれてきたんだろう」

「大袈裟な野郎だな、てめえは」

老人はそう言った。しかし、笑いはしなかった。

フトーは、改めて老人に感謝した。こうして母の葬儀を出して貰ったことにも、こうして手を握って貰えることにも——彼を笑わないことにも。

「フトー。てめえは、母ちゃんの息子として生まれて、幸せだったか？」

前を向いたまま、老人は尋ねた。

はい、とフトーは応えた。勿論です、とも。

「そうか。なら、てめえの母ちゃんも幸せだったろうよ。」

いいか、フトー。物事には流れがある。雨が大地に降るように、月が夜に昇るように。人も同じだ。流れ、移り変わる。

肉体は実を結んでもいつか朽ち果て、心は熟れてもいつか擦り切れる」

変わるもんさ、と、老人は続けた。

「てめえもそうだ。いつかまた巡り会う。てめえが命を懸けても護ろうと思うものに」

「つまり、忘れてしまおうということですか？ 俺は、母さんを」

「てめえ次第さ。だが、それでも構わんと、てめえの母ちゃんは言うだろう。母ちゃんもまた、多くの大切なものに出逢ってきた。その終着にてめえが居た。そのてめえが幸せなら、何も文句は無えだろうよ」

「でも、俺は母さんを忘れたくありません。忘れたくない」

「言っただろう。てめえ次第だ。囚われるのも、忘れるのも、背負って進むのも」

背負うって？ フトーはそう尋ねる。雨は肩を濡らし、傍らの老人を濡らし、棺を濡らしていく。石畳は灰色から光沢のある黒へ移り変わっていき、一方、老人の掌は炎のように熱くなっていく。「言葉通りさ。捨てず、持ったままで先に進む。それを繰り返す。大切なものも、大切だったものも、総て忘れない」

「それは、マヒトさんがしてきたことですか？」

老人は何も言わなかった。だが、そうなのだろうとフトーは思った。

「俺にも出来るでしょうか」

これにも、老人は返さない。フトーは老人の手を硬く握った。

老人もまた、硬く握り返した。

「マヒトさん。俺は母さんを忘れない。そして、次はあなたを護る」

「ありがてえな。だが……そうだな。出来るなら、俺を守るより、俺の大事なものを守ってくれねえか？」

「大事なもの？」

「ああ。フトー、てめえ自身と——」

老人はそこで、自身の右を見遣った。黒いワンピースを着た年端もいかない少女が一人、じつと老人を——硬く握った右手をそのままに——見返している。

「ガキ共を——てめえの妹と弟を、だ」

「弟？ 弟って……」

言うてから、思い当たった。サナの母親のお腹が、最近大きくなってきていたことを。

「生命ってのは不思議なもんだなあ、フトー。軀になる者、新しく産まれる者——誰かが薪を足してゐてえだよ。焚き火が、炎が消えちまわねえように」

「マヒトさんは」

「あ？」

「マヒトさんは、輪廻を信じますか？」

尋ねるフトー。雨を受けながら、老人は笑う。

「信じちゃいねえな。確かめようがねえもんだからよ。だが、あり得ねえとも思わねえ」

——それは、遙か遠い記憶。

「この星もぐるぐる廻ってる。なら、生命が廻ってるってのも、自然なことなのかも知れねえな」

「自然……」

彼が喪い——そして、手に入れた。

「薪を足す……」

忘れることのない、雨の日の記憶——。